スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2014年春号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 137 May 2014

センターの改称

◆　スラブ・ユーラシア研究センターへの改称について　◆

北海道大学スラブ研究センターは、2014 年 4 月 1 日をもって、「北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター」に改称しました。

看板、レターヘッド、名刺、変えるものはたくさんあります

ソ連・東欧諸国の研究を目的として設立された当センターが、「ソ連」「ロシア」といった冷戦期にイデオロギー的ニュアンスを帯びていた名称を使わず、あえて「スラブ」を冠したのは、前身であるスラヴ研究室が 1953 年に開設された際の先人の知恵でした。そのおかげで、ソ連という国がなくなった時も、センターの名前を変える必要はありませんでした。

他方でこの名称は、（旧）ソ連・東欧諸国が決してスラブ系の言語・民族だけの地域ではなく、テュルク、フィン･ウゴル、カフカス、バルト、イラン、モンゴル、ロマンス、トゥングースなどさまざまな系統が共存する、豊かな多様性を持った地域であることを反映していないという問題がありました。また、狭義のスラブ学がスラブ文献学を意味するのに対し、スラブ研究センターは長い間、どちらかといえば社会科学志向の強いセンターであったというずれもありました。

特にソ連とユーゴスラヴィアの解体後は、非スラブ系の独立国が増え、旧ソ連・東欧地域全体を「スラブ」と呼ぶのはますます難しくなりました。現在､旧ソ連･東欧の 29 の独立国（非承認国家を除く）のうち、16 が主に非スラブ系の民族が住む国であり、ロシア連邦の中にも、非スラブ系の共和国・自治管区などが多くあります。当センターでも 1990 年代半ば以降、中央ユーラシアなど非スラブ地域の研究に本格的に取り組むようになるにつれ、非スラブ諸国の方々から、「スラブ研究センター」という名前は実態に合っていないという指摘をたびたび受けるようになりました。

旧ソ連・東欧をどのような新しい地域名称で呼ぶべきか、この地域を専門とする研究機関の名称をどうするかは、世界中の研究者たちが頭を悩ませてきた問題です。最も多い解決法

は、「ユーラシア」という言葉を使うことですが、これだけでは、ヨーロッパとアジアそれぞれ全域を合わせた広義のユーラシアと区別がつかなくなるため、「東欧」「ロシア」「スラブ」などと組み合わせたさまざまな命名が試みられてきました。当センターは「スラブ・ユーラシア」という言葉を考案し、重点領域研究「スラブ･ユーラシアの変動:自存と共存の条件」(1995～97年度)、21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」(2003～07年度）をはじめとするさまざまな研究プロジェクトや、国際シンポジウム、出版物などで使ってきました。この言葉は次第に、センターの外でも広く使われるようになりました。

さらに近年センターは、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」(2008～12年度)、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」(2009～13年度）等で、中国、インド、中東など、旧ソ連・東欧以外のユーラシア諸地域の研究とも連携を深めてきました。その背後には、地域の個性の解明、特にグローバル化が進む現在の世界における旧ソ連・東欧の位置づけの考察には、比較の視点が不可欠であるという私たちの信念があります。2013年7月にセンターの点検評価のためにおこなった外部アンケートでも、ユーラシア全域を視野に入れた研究機関としての存在価値をアピールするため、発展的な改名を考えるべきだという複数の意見をいただきました。

以上のように、旧ソ連・東欧地域の文化的な多様性、およびユーラシア諸地域の研究をつなぐハブとしてのセンターの機能を名称に反映させるため、スラブ･ユーラシア研究センターへの改称を決定するに至りました。英語での略称SRC､日本語での通称「スラ研」「スラブ研」は変更せず、慣れ親しんだ名前との継続性を維持します。

この名称変更は、センターがスラブ研究に力を入れなくなることを意味するものでは決してありません。逆に、近年センターは、かつて手薄だったスラブ諸言語・文化研究の充実に取り組んでおり、教員・研究員の中の人文系と社会科学系の比率も、ほぼ均衡するようになりました。旧ソ連・東欧の中のスラブ地域と非スラブ地域の研究を両立させ、同時に旧ソ連・東欧以外の地域の研究とも連携することが、可能であり有効であることを、センターの歩み･取り組みが証明してきたと言えます。人員・予算の不足という困難はありますが、センターは今後とも、スラブ研究とユーラシア研究双方の拠点であり続けたいと考えています。皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。［宇山］

新センター長から

家田　修

スラブ研究センターは2014年4月1日をもって、スラブ･ユーラシア研究センターに改称しました。振り返れば、当センターの誕生は1955年ですから、来年で還暦を迎えます。しかも来夏には、スラブ・ユーラシア地域に係わる国際学会である国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）の世界大会が日本で初めて開催されます。このような節目の時期にセンター長を拝命し、身の引き締まる思いです。日本そして世界におけるスラブ・ユーラシア研究の発展に、微力ながらも全力を尽くしてゆく所存ですので、よろしくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

本センターはこれまで研究体制上、幾度か節目となる変化を経験して来ました。本年の

センター名改称も、目に見える著しい変化ですが、実質的には皆川センター長時代に始まり、前任の宇山センター長時代に到る長期のプロジェクト型スラブ・ユーラシア研究の集大成と言えるでしょう。すなわち、重点領域研究、21 世紀 COE、新学術領域研究、グローバル COE という大型研究プロジェクトが 20 年近くにわたって続いてきたのです。結果として、センターは名実ともにスラブ・ユーラシア研究の国際的拠点として広く認知されるようになりました。また当センターが研究対象とする地域も狭い意味での旧ソ連東欧を超えて、東アジア、南アジア、西ヨーロッパ、さらには世界の様々な境界地域にまで広がりました。こうした本センターの研究活動の進展をうけて、スラブ・ユーラシア研究は北海道大学を特色づける研究分野として位置づけられるようになりました。

今年に入って、ウクライナ情勢が急変し、世界の耳目が再びスラブ･ユーラシア地域に集まっています。専門家の中にはロシアによるクリミア半島併合で、冷戦時代が再来したと言う声もあります。また、ウクライナ情勢に対する東欧諸国の反応は多種多様でありながらも、他人ごとではないと認識する点は共通しています。ソ連崩壊後 20 年以上が経ちましたが、今回のウクライナ問題は、スラブ・ユーラシア地域をひとまとまりとして研究する必要性を、改めて示す結果となりました。

錯綜したスラブ・ユーラシア地域の現状を前に、これからどのような研究体制を打ち立ててゆけばよいのか、長期的な視野に立って考える必要があります。次世代のスラブ・ユーラシア地域研究を担うセンターの若い研究スタッフ、そして国内外の研究者コミュニティとともに、日本における新しい研究体制を創りあげてゆきたいと考えます。皆様からのご提案やご意見を心よりお待ち申し上げています。

いまひとつ研究体制と並んで重要なのは、研究テーマです。これまでセンターは変動、中域圏、帝国、地域大国、境界地域など、学術的に核となる概念を打ち出して、国際的な研究を推進してきました。これらと並んで、東日本大震災、とりわけ福島原発事故を経験した日本がいま、取り上げるべき研究課題の中には、チェルノブイリと福島の検証があるのではないでしょうか。福島原発事故後に、チェルノブイリへの関心が再び高まり、日本から原子力や放射能関連で様々な代表団がキエフやミンスクを訪れています。スラブ・ユーラシア地域研究の立場から見れば、チェルノブイリを自然科学的、あるいは工学的な視点からとらえるだけでなく、人間や地域文化の目線から捉え直す必要があります。

私はこの視点をもとに、チェルノブイリと福島を関連づける研究を 2 年ほど前から始めています。そもそもの出発点は、福島原発事故後に多くの市民から、大学および学問と社会の関係を問いかけられたことでした。未曾有の事態に際して知の在り方が問われていると思います。しかもチェルノブイリは他ならぬスラブ・ユーラシアでの出来事です。この地域を専門とする日本の研究者がもっとチェルノブイリと取り組むことが求められており、しかも相互にとって有益だとは考えられないでしょうか。ウクライナでは民俗学者たちが事故の被災地となったポレシア地方の言語文化を守り、さらに被災者の心のケアにまで及ぶ調査研究活動をおこなっています。そこから新たな知見や発見が生まれていますが、それは福島の復興につながり、貢献するものともなるのではないかと考えます。

私の本来の研究対象であるハンガリーでも 2010 年に有害産業廃棄物の大量流出事故による大災害が起きました。同災害からの賢明な復興を日本社会に示し、研究と社会の接点を提唱することは私自身の課題であると考えています。

21 世紀の始まりにアメリカ合衆国の 9.11 事件という不幸を我われは目撃し、その後も世界の各地でたびかさなる人災あるいは天災を経験しております。しかも最新の防災学は人災と天災の境界を取り払う新しい知見を生み出しつつあると、若い研究者から教えられました。たとえば領土争いは敵と味方を峻別するものであり、またテロは隣人が敵なのか味方なのか

という疑心暗鬼をつのらせるものかもしれません。あるいは自然災害とみえるものが、実は口碑伝承を無視した無理な開発による人災だと結論付けられる事があることも我われは経験しています。人類の直面する不幸を、それが人為によるものであれ、自然によるものであれ、対立や敵対関係のみを検証するのではなく、むしろ不幸から新たな学知の開拓をおこない、社会に対する創造的な貢献に結実させよう、というのは単なる夢にすぎないでしょうか。

対立と分裂、我彼の区別だけでは、スラブ・ユーラシア世界に展望は生まれないでしょう。歴史がそれを我われに教えております。学問はどうやって人類にとって有益な智慧を示せるのでしょう。その智慧をスラブ･ユーラシア地域の人々と共に創造する、それも私たちスラブ･ユーラシア研究者の使命ではないでしょうか。

研究の最前線

◆ 2014 年度夏期国際シンポジウム「危機の 30 年」開催予告 ◆

今年度の夏期国際シンポジウムは、2014 年 7 月 10 日（木）～ 11 日（金）に、センター大会議室で開かれます。第一次世界大戦から第二次世界大戦までのユーラシア諸地域における危機を、戦争・暴力の歴史と帝国・植民地の歴史が交差する連続的な現象としてとらえ、政治史・思想史のさまざまなアプローチを用いながら論じる予定です。センターと科研費基盤研究 A「比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究」の共催で、プログラムは下記の通りです（日本語訳はセンターのウェブサイトをご覧ください）。ふるってのご参加をお待ちしています。［宇山・長縄］

Thirty Years of Crisis: Empire, Violence, and Ideology in Eurasia from the First to the Second World War

危機の 30 年：第一次～第二次世界大戦期ユーラシアにおける帝国・暴力・イデオロギー

共通使用言語：英語

7 月 10 日（木）

10:00–10:15 Opening Remarks

10:15–12:15 Session 1. World War I: Battlefields between Empires

Papers: Mark von Hagen (Arizona State University) “The Entangled Eastern Front in the First World War”

Sahara Tetsuya (Meiji University) “From Macedonia to Sarajevo: Interaction between IMRO and ‘Black Hand’”

Ozan Arslan (Izmir University of Economics) “A WWI Front ‘Bon pour l’Orient’: An Analysis of a Russian War Presumed Won before It Actually Was”

Discussant: Murata Nanako (Hitotsubashi University)

Chair: Matsuzato Kimitaka (University of Tokyo)

13:45–15:45 Session 2. Muslims in the Falling Russian Empire

Papers: Diliara Usmanova (Kazan Federal University/SRC) Между подданством и верой: поведение российских мусульман в годы войны/“Between Faith and Allegiance: The Behavior of Russian Muslims during the War” (in Russian)

Zaynabidin Abdirashidov (National University of Uzbekistan/SRC) “National Idea of Turkestani Jadids: Problems and Solutions”

UYAMA Tomohiko (SRC) "Kazakh Intellectuals' Views on European Wars and Civilization in the 1910s: A Comparative Perspective"
Discussant: NAGANAWA Norihiro (SRC)
Chair: KOMATSU Hisao (Tokyo University of Foreign Studies)

16:00–18:00 Session 3. Politics of Food and Hunger
Papers: David MARPLES (University of Alberta/SRC)"The Politics of the 1933 Holodomor (Great Famine) in Ukraine: Recent Debates"
Niccolò PIANCIOLA (Lingnan University) "Sacrificing the Kazakhs: The Stalinist Hierarchy of Consumption and the Great Famine in Kazakhstan of 1931–33"
ADACHI Yoshihiro (Kyoto University) "The Nazi-German Food Autarky Policy and 'Eastward Expansion'"
Discussant: CHIDA Tetsuro (SRC)
Chair: IEDA Osamu (SRC)

18:30– Reception at Sapporo Aspen Hotel

7月11日（金）
9:30–10:15 Special Seminar: Post-Soviet Conflicts
Paper: Matteo FUMAGALLI (Central European University) "Linkage and Leverage in Post-Soviet Conflicts: Kyrgyzstan, Russia, and the 'Black Knights'"
Chair: UYAMA Tomohiko (SRC)

10:30–12:30 Session 4. Impacts of World War I on Revolutions and Nationalism
Papers: HASEGAWA Tsuyoshi (University of California, Santa Barbara) "Revisiting the February Revolution: The Duma Committee, the Provisional Government and the Formation of Dual Power"
ONO Yasuteru (Kyoto University) "WWI and Korean Nationalism"
NOSAKA-SAHARA Junko (Bilkent University) "Caucasian Emigrants in the Ottoman Empire and the Revolutionary Movements in the Caucasus"
Discussant: IKEDA Yoshiro (University of Tokyo)
Chair: SHIOKAWA Nobuaki (University of Tokyo)

13:45–15:45 Session 5. Ideas and Politics of Pan-Regionalism
Papers: KAWANISHI Kosuke (Tohoku Gakuin University) "Cross-Cultural Aspects of Dai-Tōa Kyōeiken (Great Asian Co-Prosperity Sphere)"
Viren MURTHY (University of Wisconsin-Madison) "Okawa Shumei, Asianism and the Search for a New World Order"
SAITO Shohei (Hokkaido University) "N. S. Trubetzkoy Caught into Two Racial Theories: His Article 'On Racism' (1935) and its Reception in the *Prager Presse*"
Discussant: HAMA Yukiko (Tsuda College)
Chair: MOCHIZUKI Tetsuo (SRC)

16:00–18:00 Session 6. Colonialism from the Interwar Period to World War II
Papers: Thomas LAHUSEN (University of Toronto/SRC) "Interwar Manchuria: Conflicting Memories"
NAMBA Chizuru (Keio University) "French Indochina 1940–1945: Intersection of French Colonization and Japanese Occupation"
Alexander PRUSIN (New Mexico Institute of Mining and Technology) "German Rule in the Crimea, 1941–1944: Totalitarian Visions and Colonial Practices"
Discussant: MIZUTANI Satoshi (Doshisha University)
Chair: HAYASHI Tadayuki (Kyoto Women's University)

18:00–18:15 Closing Remarks

◆　ミッションの再定義結果公表　◆

文部科学省は 2014 年 4 月 8 日に、理学分野、農学分野、人文科学分野、社会科学分野に係る国立大学のミッションの再定義結果を公表しました。

（同省ウェブサイト <http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1341970.htm>）

北海道大学の人文科学分野の研究に関わる「強みや特色、社会的な役割」欄では、「世界有数の豊富な蔵書と現地調査に基づいて、スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）地域に関する総合的・学際的な研究」に取り組んでいること、「ロシア帝国の多民族・多宗教空間における権力構造の解明、ユーラシア地域大国の経済発展メカニズムの比較、現地の視点からの国境問題の研究と政策提言をおこなっている」ことが記載され、「今後、スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）地域における歴史学、政治経済学、文化研究分野についての地域間比較を伴う総合的・学際的な研究実績を基に、引き続き、日本のスラブ・ユーラシア研究の統合と国際化を先導するとともに、国際関連学会とより緊密に連携し、共同研究を実施する」という見通しが示されました。

また、プレス配付資料では、人文･社会科学に関する各大学の強み･特色ある研究の例として、「北海道大学　スラブ・ユーラシア地域及びアイヌ文化振興に寄与する研究」が挙げられました。スラブ・ユーラシア研究が北海道大学の強みとして認識されていることが、改めて示されたと言えます。［宇山］

◆　センター改称記念シンポジウム開催　◆

皆川名誉教授の講演

スラブ・ユーラシア研究センターへの改称を記念して、2014 年 4 月 7 日に、シンポジウム「スラブ・ユーラシア研究の新しいアイデンティティ」をセンター大会議室で開催しました。宇山センター長（当時）による改称趣旨説明の後、田畑教授の司会のもと、以下の講演・報告がおこなわれ、計 44 人が参加しました。

講演：皆川修吾（北海道大学名誉教授）「スラブ・ユーラシア研究事始め：重点領域研究『スラブ・ユーラシアの変動』（1995-1997 年度）の意義」

ラウンドテーブル（報告者の所属はいずれもセンター）：

家田修　「いまなぜスラブ・ユーラシア研究なのか」

宇山智彦「思考の糧としての地域研究：中央ユーラシア・比較研究の展望」

野町素己「スラブ・ユーラシア研究における言語研究の役割と展望」

地田徹朗「ボーダースタディーズから学んだこと：時間と空間をめぐるスラブ・ユーラシア研究の新たな課題」

皆川名誉教授の講演は、1990 年代にセンターの活動が拡大・発展した時期におこなわれた全国的共同研究の成果と苦労を偲ばせるものでした。ラウンドテーブルでは、地域研究の目的と理論的射程、地域研究者ならではの比較研究のあり方、現地調査で得られる感覚の意義、言語研究の地域研究への寄与と国際化の現状、地域研究における空間論・地誌・民族誌の重要性などが論じられました。フロアを交えての討論では、スラブやユーラシアという言葉が、スラブ主義・ユーラシア主義との関係で持ちうるイデオロギー性、最近のウクライナ情勢か

ら浮かび上がる、帝国論と境界研究の接合の必要性などが活発に議論されました。スラブ・ユーラシア研究の活力と、さらなる発展の可能性を窺わせるシンポジウムとなりました。

また、会場には皆川先生以外にもセンター元教員の先生方がお見えになり、懇親会は懐かしい想い出の話で盛り上がりました。センターの活動の蓄積とOBの先生方の貢献を振り返りつつ、新しい名称でのセンターの門出を祝う、記念すべき日となりました。[宇山]

新しいバックパネルの前で記念撮影

◆　ベオグラード大学との共同ワークショップ・シンポジウムの開催　◆

2月上旬に、北大が大学間協定を結んでいるベオグラード大学との共同研究集会が2件開催されました。

1件目は「多民族社会におけるアイデンティティの形成・分断・再統合：ヴォイヴォディナ地域研究確立に向けて」と題されたもので、2月2日に地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ（代表：亀田真澄氏）との共催という形で、北海道大学東京オフィスにて開かれました。これは2010年にセンターでおこなわれたヴォイヴォディナ研究ワークショップの続編という位置づけで、若手を中心に多分野の研究者との連携を確立し、当該地域の学際的な地域研究の分野としての可能性を模索することを目的としていました。本ワークショップの参加者は、歴史学、音楽研究、メディア論、言語学、社会学など多様であり、多面的な討論も充実していました。また、前回に研究課題として挙げられていた、政治的なレベルで認められていない「隠れたマイノリティ」に焦点を合わせた研究報告も複数ありました。中でも、基調講演者として招へいされたビリャナ・シキミッチ氏（セルビア学士院バルカン学研究所）のロマ研究は、セルビアの一地域においてさえもロマがいかに多様なアイデンティティを持っているかということを分析した大変興味深いものでした。このワークショップ自体の規模は大きくはありませんが、4か国から若手研究者が参加し、討論と基調講演に世代の異なる経験豊かな研究者が加わったことは意義深く、また会場からはベオグラード大学の研究者を中心に次から次へと鋭い質問が出されたことは、本邦の若手研究者にとって刺激的な経験になったはずです。

ワークショップの様子

これを機に、研究領域のますますの国際化、そして今後の新たな国際共同研究の可能性も開けたと思います。本ワークショップのプログラムは、以下の通りです。

Opening Remarks
Masumi Kameda (Japan Society for the Promotion of Science)

Session 1. Vojvodina: Social, Cultural, and Historical Contexts
Chair: Masumi Kameda (Japan Society for the Promotion of Science)
Shinichi Yamazaki (Univ. of Tokyo) "Regional Concept and Ethnic Diversity of Vojvodina
Bojan Belić (Univ. of Washington) "Vojvodina's Linguistic Frontiers: Confirming and Segmentation"
Yoshiko Okamoto (Univ. of Tokyo) "Holdovers from the Past in Vojvodina: Hungarian Cultural Representations"
Discussant: Susumu Nagayo (Waseda Univ.)

Keynote Lecture
Chair: Motoki Nomachi (SRC)
Biljana Sikimić (Institute for the Balkan Studies SASA) "Roma, Bayash and Ashkali in Contemporary Vojvodina: Hidden Minorities Perspective"

Session 2. "Hidden" Minorities: The Past, Present, and Future of Vojvodina's Ethnicity
Chair: Yoshiko Okamoto (Univ. of Tokyo)
Masumi Kameda (Japan Society for the Promotion of Science) "The Engineering of Identity: A Discussion of the Bunjevac and Its Implications"
Marija Todorova (Hong Kong Baptist Univ.) "Vojvodina's Multilingualism: The Case of Macedonian Language"
Motoki Nomachi (SRC) "The Fall and Rise of the Banat Bulgarian Language in Serbia"
Discussant: Keiko Mitani (Univ. of Tokyo)

General Discussion
Chair: Motoki Nomachi (SRC)

シンポジウム関係者たちと。後列左からポポヴィッチ氏、筆者、ドラギチェヴィッチ氏、越野氏、永山氏。前列は左からラディッチ氏、トリチコヴィッチ氏

2件目は、タイトルは「＜東＞と＜西＞から見たセルビア語：共時・通時・類型」というもので、2月5日にセンター大会議室で開催されました。セルビアは、歴史的に西欧・ロシア・イスラム世界との接触を持ち、これらの文化からさまざまな影響を経験してきました。その意味について、言語を通して（再）検討することを目的としたシンポジウムでした。一言に「言語を通して」といっても実に多様なアプローチが考えられますが、本集会でも民族言語学（ライナ・ドラギチェヴィッチ氏）、歴史言語学（プルヴォスラヴ・ラディッチ氏）、言語対照分析（ディヴナ・トリチコヴィッチ氏）、スラヴ諸語類型論（リュドミラ・ポポヴィッチ氏）、地域言語学（野町）など様々な手法を用いた分析がなされ、セルビア語に見られる＜東＞と＜西＞それぞれの特徴が幅広く論じられ、セルビア語の特徴がヨーロッパ、バルカン、スラヴ、世界といった様々なレベルでの位置づけが検討されました。本研究集会の研究成果は、ポポヴィッチ氏と野町の編集で、今年度中に論文集として出版される予定です。また、次回

のシンポジウムはベオグラード開催の方向で関係者と検討しているところです。

今回の 2 件の研究集会組織にあたりまして、ご協力くださいました関係者および関係諸団体、また参加者の方々に、紙面をお借りしてお礼申し上げます。特に、ポポヴィッチ氏は 2010 年にセンターに外国人研究員として滞在経験があり、本学との協定締結においても中心的な役割を果たされ、また 2 件の研究集会の組織にも積極的に関与されました。深くお礼申し上げます。［野町］

Opening Remarks

Tomohiko Uyama (SRC, Director); Motoki Nomachi (SRC); Ljudmila Popović (Belgrade University)

Session 1. West and East in Serbian Lexicon: Synchrony and Diachrony

Chair: Motoki Nomachi (SRC)

Райна Драгичевич (Белградский университет) “Лингвокультурологический и семантический анализ концептов «Восток» и «Запад» в сербском языке”

Prvoslav Radić (Belgrade University) “On the History of the Oriental Lexicon in Serbian”

Session 2. West Meets East: Serbian and Japanese Juxtaposed

Chair: Go Koshino (SRC)

Divna Tričković (Belgrade University) “The Grammatical Category of Temporality in Serbian and Japanese: a Contrastive Analysis”

Session 3. Placing the Serbian Language in the Slavic and European Contexts

Chair: Tetsuo Mochizuki (SRC)

Motoki Nomachi (SRC) “Possessive Constructions in Serbian: Some Implications for Areal Typology”

Людмила Попович (Белградский университет) “Лексические и грамматические показатели эвиденциальности в сербском языке в сравнении с другими славянскими языками”

General Discussion

Closing Remarks Motoki Nomachi (SRC)

◆ ミロラド・ラドヴァノヴィッチ氏講演会 ◆

3 月 22 日に、日本スラヴ学研究会と本学 GCOE（代表：岩下明裕）の共催で、旧ユーゴスラヴィアを代表する言語学者ラドヴァノヴィッチ氏（ノヴィサド大学 / セルビア学士院）の特別講演会が開催されました。ラドヴァノヴィッチ氏はノヴィサド学派の研究者で、イヴィッチ夫妻の薫陶を受けた学派の正統後継者と呼べる研究者です。主に西側世界の言語理論に深く通じ、その成果を用いてセルビア（・クロアチア）語の分析をおこなってきました。氏の関心の幅は大変広く、現在は数学者のご子息と理論言語学の共著を執筆中とのことです。ラドヴァノヴィッチ氏は、特に旧ユーゴスラヴィアにおける社会言語学のパイオニアとして知られており、氏の著書「社会言語学」は、1978 年以来版を重ね、現在はこの分野の古典となっています。

ラドヴァノヴィッチ氏東京観光中（浅草寺）

今回の講演会は、「今日のセルビア語の諸相」と題され、ユーゴスラヴィア崩壊から現在に至るまでのセルビア語の言語状況、特に言語政策と言語計画に焦点を当て、セルビア語地域とその境界の内外での変化の分析がおこなわれ、また現状についても論じられました。

余談になりますが、ラドヴァノヴィッチ氏の来日は2回目で、実に30年ぶりだそうです。前回の来日は1982年の国際言語学者会議の時で、当時はローマ字の表示が少なく、東京でも英語が全然通じなかったのでとにかく大変だったとのこと、現在は日本にセルビア・クロアチア語研究者が複数いるなど当時では考えられないことだらけで、隔世の感が否めないとのことでした。［野町］

◆　公開講座　◆
「記憶の中のユーラシア」開催中

今年度の公開講座は「記憶の中のユーラシア」と題して、戦争や災害などの歴史的な記憶を取り上げます。カラー写真による革命前のロシア帝国の記憶、チェルノブイリ原発事故、ナポレオン戦争、尼港事件などスラブ・ユーラシア地域に関わる事例のほかにも、中国の社会主義革命やベトナム戦争の記憶をめぐる講義も含まれています。［越野］

日　程		講　義　題　目	講　師
第1回	5月12日（金）	未来へ向けた記憶：帝政ロシアをカラーで撮った写真家	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教　授　望月哲男
第2回	5月16日（金）	中国の革命観光	亜細亜大学 准教授　高山陽子
第3回	5月19日（月）	ベトナム人から見たベトナム戦争の記憶	東京外国語大学 教　授　今井昭夫
第4回	5月23日（金）	チェルノブイリ原発事故の記憶と観光地化	株式会社ゲンロン 上田洋子
第5回	5月26日（月）	ロシア文化の中の対ナポレオン戦争の記憶	千葉大学 准教授　鳥山祐介
第6回	5月30日（金）	亞港と尼港の旅人たち：ロシアと日本のはざまの記憶	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 研究員　井澗　裕
第7回	6月　2日（月）	記憶の中の大祖国戦争：ロシアとベラルーシ	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 准教授　越野　剛

◆　フィンランドとの二国間交流事業の採択　◆

日本学術振興会の二国間交流事業（フィンランドとの共同研究）「ロシア最後のエネルギー・フロンティア：極北地域の持続的発展への挑戦」が採択され、本年9月から2年間実施されることになりました。本研究は、石油・ガス開発をはじめとする北極圏開発が進むなかで、ロシアの極北地域の発展が持続可能なものであるのかを明らかにすることを目的とします。北極海航路の問題もカバーされ、文理連携や産官学連携なども視野に入れています。日本側はセンターの田畑を代表者とし、本村真澄氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）ら7名がメンバーとなっています。フィンランド側は、ヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所のヴェリ-ペッカ・ティンキネン氏を代表者として、トゥルク大学やラップランド大学の研究者がメンバーとなっています。本年9月にはヘルシンキでキックオフ・セミナーをおこない、アルハンゲリスク方面で共同の現地調査をおこなう予定です。［田畑］

◆　北海道大学における「北ユーラシア研究会」の発足　◆

本年1月30日にロシアとその隣接地域について研究をおこなう北大の研究者が集まり、情報交換ネットワークとしての「北ユーラシア研究会」が発足しました。これは、昨年11月

にサステナビリティ・ウィークの行事として開催された日ロ学術シンポジウムの実行委員会メンバーの提案によるもので、部局を越えた横の連携を促進することを目的としています。発足会には、学内 11 部局から 31 名の研究者と研究支援者が集まり、会長には、センターの田畑、副会長には地球環境科学研究院の杉本敦子教授と低温科学研究所の江淵直人教授が選出されました。今後は、メーリングリスト等を利用して情報交換を活発化させるとともに、異分野間連携研究を立ち上げるためのワークショップの開催などを予定しています。［田畑］

◆　ウクライナ情勢に関する講演会の開催と論考の連載　◆

ウクライナ情勢が、2014 年 2 月の政変およびロシアの介入により緊迫していることは周知の通りですが、極めて複雑な事態で、国際的な情報戦の様相を呈しているだけに、日本のメディアに流れる情報だけでは理解が困難なところがあります。センターでは、ウクライナ情勢に関する専門家の知見を提供するため、まず 3 月 4 日に藤森信吉氏の講演会「ウクライナの『東西選択』を考える」を、北海道スラブ研究会の主催で開催し、過去 20 年余りのウクライナと EU・ロシアとの関係と、最新の現地調査から見たデモ・政変の状況を話していただきました。

また 4 月以降、センター内外の研究者がウクライナ情勢をさまざまな角度から分析する論考を、ウェブ上で連載しています。5 月 20 日現在、以下の 5 本が掲載されていますので、ぜひご一読ください。

服部倫卓「サッカーの視点から見たウクライナの政治変動」
岩下明裕「ウクライナ危機で考えたこと：ポスト冷戦・境界レジームのほころび」
大串　敦「想像のウクライナ東西分裂論を超えて：現地調査を踏まえた若干の考察」
宇山智彦「ウクライナ危機から見るロシアの危機」
松里公孝「クリミア現地を無視してはならない」

当面、トップページの What's New から各論考への直接のリンクを貼っています。恒常的には、「研究員の仕事の前線」ページからリンクしてあります。

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/index.html　　［宇山］

◆　アナスタシア・フィオードロワさんの滞在　◆

今年度の新しい学振特別研究員として、アナスタシア・フィオードロワさんがセンターに着任しました。京都大学大学院人間･環境学研究科でこの春に博士号を取得したばかりのユーラシア映画の専門家で、特別研究員としての研究テーマは「戦後」の東アジアにおけるリアリズム映画の比較研究。ソ連社会主義リアリズムの影響力を背景に、今井正、木下恵介、五所平之助、吉村公三郎、韓国におけるユ・ヒョンモク、シン・サンオク、キム・ギヨン、中国における桑孤、水華、謝晋といった映画監督たちの作風を比較研究するという野心的なプランです。在任中ロシアやアメリカでの滞在研究も計画しているとのことです。［望月］

◆　専任セミナー　◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。

1 月 31 日：**田畑伸一郎** "Emergence of Regional Powers in the International Financial System"
センター外コメンテータ：大野成樹（旭川大学）

今回の田畑専任研究員セミナーの論文は、Routledge から出版される *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia* に収録予定のもので、2011 年に『比較経済研究』誌で発表された論文（上垣彰氏との共著）および『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』（ミネルヴァ

書房、2013 年）に収録されている邦語論文を下敷きとして、英文で書き改められたものです。
コメンテータの大野氏からは、ロシアについて、中央銀行の為替介入により貨幣供給が増加し、それが物価上昇につながったとする田畑論文の主張への疑問、中国について人民銀行の不胎化政策が 2007 年以降不完全になったという捉えかたに対して、不胎化の手段が 2007 年以降変化したのではないかという疑問などが出されました。
その他の参加者からは、下敷きとなった邦語論文の単なる改訂版ではなく、それらが主に扱っていた 2008 年以前と、その後の 2009 ～ 2012 年では状況が大きく変化したことを反映して力点が置かれる部分が修正されている点、特に邦語論文で重視されていた「再生ブレトン・ウッズ体制」がらみの議論が後景に退いている点などが指摘されました。［山村］

2 月 10 日：**越野剛**「幻想と鏡像：現代ロシア文学における中国のイメージ」
センター外コメンテータ：中村唯史（山形大学）

越野氏のペーパーは、氏が近年取り組んでいるロシアと中国の比較イメージ研究を扱うもので、新学術領域研究第 6 班の研究成果の一つです。コメンテータの中村唯史氏は、ロシア文学における中国のイメージを 19 世紀を前史とし、現代まで扱うイメージ論であり、東・西という単純な対立項にはなっていないこと、ロシアと中国のイメージは鏡像関係にはなっていないことが示された画期的な論文であると評されました。出席者からは、政治的に重要である 1960 年代の中ソ対立期の作品分析がないこと、また地方作家の作品にも目を向ける必要性、さらに作品選択の根拠が必ずしも明確ではない点などが指摘されました。これに対し、中村氏からは、政治と文学を直接的に結び付けることの危険性、また必ずしも文学に政治状況が直接反映されるわけではないという越野論文への援護射撃もありました。越野氏のみならず出席者にとっても、専任研究員セミナーが学際的で、率直に意見交換をおこなう場として重要であることが再確認されました。［野町］

2 月 17 日：**望月哲男**「帝国の暴力と身体：トルストイとガンディーのアジア」
センター外コメンテータ：杉本良男（国立民族博物館）

今回提出されたペーパーは、新学術領域研究第 6 班の研究成果の一つをなすもので、トルストイとガンディーの非暴力思想の比較、その影響関係について、歴史的背景、地域文化的特徴、個々の体験などの分析を通して論じるものでした。望月研究員が長年取り組んできたトルストイ研究に、比較研究の立場から新たな光を当てる成果と言えます。インド研究を専門とするコメンテータの杉本良男氏からは、マダム・ブラバツキーとの関わりやガンディーの生涯で非暴力思想に到達するまでの個人的経験について説明がなされ、日露戦争がトルストイとガンディー両者を近づけるきっかけになったことなど、従来のガンディー研究であまり知られていなかった点が望月論文では論じられている点において、本論はトルストイ研究だけではなくガンディー研究への貢献としても高い評価を受けました。出席者からは思想史や文学研究といった枠を超え、比較帝国論などにも有益である射程の広い論文であると指摘されました。その一方で、両者に用いられている概念が本当に等価であるかどうか、思想家と政治家、観察者と経験者という立ち位置の違いなどについてより慎重になる必要があることなども議論されました。［野町］

2 月 28 日：**野町素己** “On the Kashubian Past Tense Form *Jô bëł* ‘I was’ from a Language Contact Perspective”
センター外コメンテータ：佐藤昭裕（京都大学）

今回の提出論文は、カシュブ語の動詞過去形における be 動詞現在形の省略の傾向と原因を分析するものでした。be 動詞の省略に関しては、従来言語接触と無関係の言語内的変化と言語接触に基づく変化という二つの説がありました。野町は、言語接触に基づく代名詞使用の高頻度化によって、be 動詞の消失が引き起こされたことをスロヴィンツ方言に注目して論じました。コメンテータの佐藤昭裕氏はスラヴ諸語の動詞過去形の類型学的・文献学的視点から本論文の意義と問題点を指摘されました。出席者からは社会・歴史背景を論じる必要性、言語圏の定義の在り方、代名詞の類型化の問題などが指摘され、ロシア語との比較研究も提案されました。［野町］

3 月 5 日：**家田修**「災害復興のハンガリーモデル」
センター外コメンテータ：城下英行（関西大学）

今回の家田専任研究員セミナーの論文は、2010 年 10 月にハンガリーで発生した産業廃棄物（赤泥）流出による大規模災害の実情と復旧プロセスを丹念なフィールドワークによりまとめたもので、かつこれをモデル化し、福島原発事故被災にも応用しようという野心的な大著でした。

家田氏はこれを近年取り組んできた災害復興研究の到達点の一つとし、自ら「問題解決型」のものと位置づけています。なかでも被災者を支える制度づくりのために「私的資産形成に公費を投入すべき」というその大胆な主張は参加者にインパクトを与えました。モデルの精緻化や現地の声のより vivid な描写などについて注文もありましたが、「他の事例を知ることで日本の規範を変える契機となりうる」本論文の一般書としての刊行を期待する評者の意見は説得的でした。［岩下］

3 月 5 日：**宇山智彦**「権威主義体制論の新展開に向けて：旧ソ連地域研究からの視角」
センター外コメンテータ：大串敦（慶應義塾大学）

今回の宇山専任研究員セミナーの論文は、2013 年度日本比較政治学会大会共通論題の報告を加筆修正したもので、学会年報第 16 号に掲載されます。論文は、近年様々な形容詞を付与することで分析対象を拡大してきた権威主義体制論が、にもかかわらず「民主化」の観念から自由になり得ない限界を、中央アジアを軸とした旧ソ連地域の分析を通じて、脱構築しようという意欲的な研究です。

評者は、権威主義体制論のこれまでの理論的展開の上に本論文の意義を位置づけ、旧来の議論の問題点を浮き彫りにした点でこれを高く評価する一方で、この論文も「包括性が得られた半面、全体の統合性が損なわれた印象」があること、さらに権威主義体制という言葉が生み出す文脈をどうとらえるかなど重要な問題提起をおこないました。この種の「頭の体操」を必要とする論文は、討論では参加者自身の「頭の使い方」の映し鏡にもなり、普段にもまして刺激の多いセミナーとなりました。［岩下］

3 月 31 日：**山村理人**「ロシア極東農業の動態と展望：空間分析・地理的アプローチ」
コメンテータ：田畑伸一郎（センター）

今回提出されたペーパーは、2000 年代以降のロシア農業の変容についての二つの見解、すなわち生産回復や投資の増大と農村の荒廃と崩壊という、一見矛盾する特徴づけを再考することを目的としたもので、事例としてロシア極東地方を取り上げて、ソ連時代に形成された構造、ソ連崩壊後に起きた変動と現在にいたるまでの動態、今後の展望について考察を加えたものです。

本論文は統計の分析に基づいて旧ソ連時代からの変化が詳細に論じられている点で評価される一方、現地調査に基づく直接的な分析ではなく、間接的な統計分析に重点が置かれすぎている点、また農業経営体の分析などがおこなわれていない点が指摘され、今後の課題となりました。［野町］

◆　研究会活動　◆

ニュース 136 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。ただし、今号で独立して紹介したものは省略します。［大須賀］

2 月 26 日　**佐藤亮太郎**（旭川医科大）「北海道侵略小説試論」（ユーラシア表象研究会）

2 月 27 日　**野部公一**（専修大）「旧ソ連諸国の近年の畜産状況：ロシアを主な事例として」（客員研究員セミナー）
安達大輔（東京理科大）「見えないものを見る？ゴーゴリの文学とイメージ」（北海道スラブ研究会）

3 月　4 日　**藤森信吉**（センター）「ウクライナの『東西選択』を考える」（北海道スラブ研究会）

3 月6-7 日　「プラトンとロシア」研究会　**北見諭**（神戸市外国語大）「全一性とその現出：セミョーン・フランクの『知識の対象』におけるフッサール、ベルクソン、プラトン」；**貝澤哉**（早稲田大）「グスタフ・シペート『解釈学とその諸問題』：「意味」、「表現」、「理解」概念をめぐって」；**根村亮**（新潟工科大）「E. トルベツコイのプラトン論」；**下里俊行**（上越教育大）「ニコライ・ナデージュヂンの歴史哲学とロシア史観」；**山本健三**（島根県立大）「反観念論・反神学・反文明：1870 年代初頭ミハイル・バクーニンの哲学的境地」

3 月 13 日　**宇山智彦**（センター）「中央アジア・カフカスからロシアへの労働移民：モスクワ、ペテルブルグ、スルグト出張報告と言説分析」（昼食懇談会）
貝澤哉（早稲田大）「ウラジーミル・ナボコフにおける《擬態》の欲望：『絶望』（1936）を中心に」（客員研究員セミナー）

3 月 14 日　第 8 回スラブ研究センター公開講演会　**長縄宣博**（センター）「イスラームのロシア：調和と暴力の複雑な関係」

3 月 15 日　**古澤文**（愛知大）「新中国以降の新疆ウイグル自治区における農業の現代的変容」；**渡邊三津子**（奈良女子大）「カザフスタン南東部ジャルケント周辺における農業の現代的変容」（北海道中央ユーラシア研究会）

3 月 27 日　**長與進**（早稲田大）「『チェコスロヴァキア日刊新聞』（1918-1920 年）を読んで：三つの論点（シチェファーニク報道／シベリア出兵へのまなざし／朝鮮独立運動）」（客員研究員セミナー）
岩本和久（稚内北星学園大）「ロシア文学とスポーツ」（客員研究員セミナー）
本田晃子（センター）「地下の夢、あるいは悪夢：ソヴィエトおよびポスト・ソヴィエト映画に見る地下鉄空間」（ユーラシア表象研究会）

4 月 12 日　一緒に考えましょう講座　**岩本由輝**（東北学院大）「東京電力福島第一原発の建設と『慶長津波』の矮小化」

4 月 13 日　**岩本由輝**（東北学院大）「文献解読をめぐる諸問題」（中・東欧研究会）

4 月 24 日　ニーデルハウゼル博士著『総覧　東欧ロシア史学史』（北海道大学出版会、2013 年）輪読会第一回：第一章「ポーランドの歴史叙述」（中・東欧研究会）

4 月 26 日　**ビタバロヴァ・アセリ**（北大・院）「上海協力機構に対する中央アジアと中国の認識についての考察」（北海道中央ユーラシア研究会）

5 月　3 日　一緒に考えましょう講座　**木村真三**（獨協医科大）「福島で生きる人を支えるための放射能測定」

5 月　8 日　**金山浩司**（センター）「一歩後退、二歩前進：1920 ～ 30 年代の物理学とソ連権力」（北海道スラブ研究会・総会）

グローバルCOE

2014 年 2 月 13-15 日の 3 日間、センター大会議室において本プログラム主催による最後のシンポジウムが開催されました。

GCOE プログラムリーダーの岩下明裕

第 1 日目（13 日）は、冒頭で本プログラムのリーダーである岩下明裕が、境界研究をスラブ研究センターで推進する意義について述べた後、本プログラム監修 DVD「知られざる国境の島・五島」が上映されました。講義では、まず高田喜博氏（HIECC：公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター）が、地方におけるシンクタンクの役割について述べ、日本の境界自治体に対してコーディネーター的役割を果たせる、と指摘する一方で、各境界自治体はこれまで互いに興味がなく、かつ予算の取り合いのライバルであり、今後は互いに共通の課題を見出して中央に声を上げ、行政以外のキーパーソンを見出す必要性があることを訴えました。午後の講義では、大西広之氏が、入管の問題を、法律面と現場の運用の両面から解説しました。ボーダーツーリズムの観点からは、国家財政の制約から入国審査を境界自治体に配置できず、外国人観光客を直接受けれることができない、という問題点が指摘されました。次いで山上博信氏が、日本の境界の移動に翻弄される島嶼地域の暮らしの現状が紹介されました。いずれの報告も、予算の制約下で、どのように離島・境界地帯の発展を設計し、国境線を管理するのか、という問題を考えさせられるものでした。

2 日目（14 日）は、境界地域の自治体関係者による報告がなされました。まず、DVD および古川浩司氏（JIBSN 事業部会長・中京大学）の講義で境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）の活動が紹介されました。古川氏が、境界地域には安全保障の最前線と国際協力のゲートという両面性があることを指摘した後、与那国町、竹富町、対馬市、五島市、稚内市、根室市の自治体関係者が、自らの取り組みと、中央からの支援の必要性を訴える報告をおこないました。いずれの自治体も、かつては境界の位置を利した黄金時代を記憶しているものの、今日では地場産業の衰退、高齢化・人口流失という問題を抱えており、地場産業の育成に加え、境界という位置を地域発展に生かしたい意向を持っています。

3 日目（15 日）は、2 日目と対応する形で、上記自治体（与那国、根室、対馬）で調査・インターン活動に関わった若手研究者による報告がなされました。いずれも、第三者の冷徹な眼による現状認識に基づいた報告で、中央に依存しない発展を考えた場合に、境界地域の官・民両者に新たな取り組みが必要であることを強く示唆するものでした。午後からは、本プログラムのアカデミックな成果に焦点が当てられました。まず本プログラム研究員によるラウンドテーブルでは、「境界」が自らの地域研究に与えた意味が強調される一方で、ユーラシアの境

界事象・研究成果を世界の境界研究ネットワークに発信する場合、北米を中心とした境界研究の手法・理論の習得が必要であるとの反省点が出されました。次いで、野町素己（センター）、望月恒子（文学研究科）、山崎幸治（アイヌ・先住民研究センター）、樽本英樹（文学研究科）、望月哲男（センター）各推進員による、自らの「境界研究」の成果の一端が披露されました。

最後に、岩下拠点リーダーが報告をおこない、本プログラムの成果を世界の境界研究の潮流の中で位置付け、特に海の境界の重要性や、ポスト・コロニアルとは一線を画するユーラシアの境界事象の紹介で意義があったと総括しました。そして今後の研究課題として、国境画定そのものの研究、境界のマネージメント技術の研究、我が国にあるユーラシア地域研究系のセンターとのコラボレーションによる研究推進、境界地域の意識や研究成果を市民社会、政治に届けるためのボーダージャーナリズムの確立を挙げ、UBRJ（北海道大学スラブ研究センター・境界研究ユニット）や JIBSN の今後の意義が強調されました。

5 年にわたる本プログラムのファイナルシンポジウムの締めにあたり、グローバル COE プログラムの立ち上げ・運営を強くサポートした佐伯浩前北大総長が挨拶に立ち、閉幕となりました。

3 日間を通じた延べ参加人数は 179 名に上りました。本シンポジウムは、大学院共通授業科目を兼ねており、各研究科の院生がストレートな質問を報告者に浴びせ、活発な議論が交わされたことが特筆されます。［岩下］

懇親会後の集合写真。なつかしい OB の方々の姿も

人事の動き

◆　松里公孝教授の転出と記念講演会　◆

松里公孝教授が 2014 年 3 月末日でセンターを退職し、東京大学大学院法学政治学研究科教授となられました。松里先生は 1991 年 10 月にセンターに着任し、2006 年 4 月から 2008 年 7 月まではセンター長を務められました。ロシア帝国史と旧ソ連諸国政治（特にロシアの地方や、環黒海地域の非承認国家）に関する数多くのテーマについて、英米の学術誌を始めとす

るさまざまな場所で発表された個性豊かな研究成果は、広く知られています。また、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP、2008-12 年度）の実施や、ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）2015 年世界大会の日本への招致の先頭に立ち、日本のスラブ・ユーラシア研究の国際化に大きく貢献されました。

退職記念講演会での松里先生

松里先生の退職を記念して、3 月 25 日に講演会「ソ連崩壊後のスラブ・ユーラシア地域研究：一次情報の利用と国際化」がセンター大会議室で開かれました。大学院生時代のレニングラード留学などの想い出をまじえながら、これまでに研究したさまざまなテーマの概要を話されました。質疑応答では、現地調査されたばかりのクリミア情勢に議論が集中し、まさに最先端の研究者として今後も活躍を続けられる松里先生らしい最終講演会となりました。［宇山］

◆　地田徹朗さんと森下嘉之さんの助教就任　◆

本年 4 月 1 日をもって**地田徹朗**さんがセンター助教に就任されました。地田さんは東京大学大学院総合文化研究科でソ連史を専攻され、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」に関わる学術研究員としてこれまでセンターに 3 年間勤務されました。歴史地理学の要素を取り入れた中央アジア（特に、カザフスタン）環境史研究を軸に、境界研究ユニットの担当として活躍される予定です。［岩下］

本年 4 月 1 日をもって**森下嘉之**さんがセンター助教に就任されました。森下さんは東京大学大学院総合文化研究科で東欧史を専攻され、博士課程修了後、日本学術振興会特別研究員として本センターに 3 年間滞在されました。チェコ住宅社会史研究を中心に、現在はチェコ・ポーランド国境地帯における宗教と民族の関係、あるいは比較住宅史にも関心を広げています。［家田］

藤森信吉特任助教は、2014 年 3 月 31 日付けで退職し、共同研究員となりました。

木山克彦特任助教は、2014 年 3 月 31 日付けで退職し、東海大学清水教養教育センター特任講師となりました。［編集部］

◆　非常勤研究員紹介　◆

金山　浩司　2014 年 4 月に着任（プロジェクトスペース）
研究テーマ：ソ連科学技術史

なお、昨年度に着任した辛嶋博善さんは、引き続き今年度も留任されます。本田晃子さんは任期満了し共同研究員となりました。［編集部］

◆　2014 年度の客員教授・准教授　◆

公募していました客員教授･准教授は審査の結果、次の 6 名の方々にお願いすることになりました。［編集部］

氏名	所属	研究テーマ
岩本　和久	稚内北星学園大学情報メディア学部	近現代ロシア文学におけるスポーツ表象
佐々木史郎	国立民族学博物館先端人類科学研究部	スラブ・ユーラシア地域の博物館における文化表象
佐藤　隆広	神戸大学経済経営研究所	中国とロシアとの比較におけるインド中央地方関係と地方分権化
田村　容子	福井大学教育地域科学部	1950 年代の中国プロパガンダ芸術におけるソ連の表象
等々力政彦	トゥバ民族音楽家	南シベリア 9 地域における，先住民言語による地名のデータ化
松里　公孝	東京大学大学院法学政治学研究科	東部・南部ウクライナの地域間政治力学

◆　事務職員　◆

昔農尚子事務係員（事務室）は、工学系事務部情報科学研究科事務課に、山崎茜事務補佐員（事務室）は、理学・生命科学事務部事務課に移られました。

合田由美子事務補佐員、佐藤ちはる事務補佐員、山本房子事務補佐員、九石直也研究支援推進員、鈴木真理子研究支援推進員、千葉海事務補助員は退職されました。

新任紹介：室谷愛事務主任（事務室）、中嶋奏子事務補佐員（事務室）、小谷内千尋研究支援推進員（ワークステーション室）、野川美樹事務補助員（図書室）　［乾］

「境界を越える人々」を通して見るロシア社会内の境界線：中央アジア・カフカス労働移民の調査から

宇山智彦（センター）

広域的社会変動としての労働移民

2013 年度末、研究大学強化促進事業の一環として、北ユーラシア地域での国際共同研究のフィージビリティスタディを行うための出張費がスラブ研に付き、数人の教員がそれぞれテーマを設定して出張してきた。私が設定したテーマは、「中央アジア・カフカスからロシアへの

労働移民に伴う越境的社会変動」であった。

近年ロシアを訪れた人は誰でも、商業、外食産業、建築業、清掃業などで中央アジア・カフカス系の人が多く働いているのを目にしていることだろう。無許可で働く人も多いため人数には諸説あるが、慎重な推計でもロシアの外国人労働者は約500万人と見積もられている(そのほかに、既にロシア国籍を取得した移民も多数いる)。許可を得ている外国人労働者の中では、中央アジアのウズベキスタン、タジキスタン、クルグズスタン（キルギス）国籍の者が約56％、南カフカスのアルメニア、アゼルバイジャン国籍の者が7％程度を占める（そのほかに出身国として多いのは中国、ウクライナ、モルドヴァ）[(1)]。北カフカス出身者も、ロシア国民であるため法的には外国人労働者扱いではないが、ロシア各地で目立つ存在となっている。こうした移民労働者（日本語でいう出稼ぎ労働者を含む）は、中央アジア・カフカスの側にも、送金による経済的貢献と、若年・中年層の流出による社会的変化（夫・父の権威の低下、女性の労働の増加、離婚など）の両面で影響を与えており、中央ユーラシア研究者の間で大きな話題になっている。ロシアの社会変動を広域的なダイナミズムの中で理解するにも、移民労働者の問題は欠かせない。

当時私はセンター長だったので、せいぜい1週間しか調査に行けず、欲張っても3都市ぐらいしか滞在できない。移民労働者と研究者の多さから言ってモスクワとサンクトペテルブルグは欠かせないとして、もう1カ所をどこにするか。北大がこれから進めようとしている北ユーラシア研究は、理系の研究者が多く参加する学際的なもので（北ユーラシア研究会の発足に関する本号の田畑氏の記事参照)、持続可能な開発の問題と結びつけられる話題が望ましいことから、私が白羽の矢を立てたのは、ロシア最大の石油産地、ハンティ・マンシ自治管区だった。極東・東シベリアやヨーロッパ・ロシアと違い、日本での研究が手薄な西シベリアにぜひ行ってみたいという気持ちもあった。同自治管区では、行政の中心地はハンティ・マンシースク市だが、経済的な中心で人口も多いのはスルグト市であり（スルグトネフチェガス社の企業城下町)、モスクワやサンクトペテルブルグとの間の飛行機もスルグトの方が便利である。またインターネットで、移民と地元住民の間の緊張関係（特にカフカス系とスラヴ系の暴力的な小競り合い)が多く報じられていたのもスルグトであった。そこで、モスクワ、サンクトペテルブルグ、スルグトの3都市を訪れることにした。

ロシア滞在は2月23日から3月2日までの1週間で、3都市に2日ずつ、そして帰路の飛行機乗り継ぎ時間を利用してモスクワにもう半日いることにした。短い時間だが、幸い知人たちから多くの連絡先を入手し、モスクワで10人、サンクトペテルブルグで7人の研究者や移民団体・宗教団体関係者、人権活動家などと会うことができた。約2時間に1件の面談で、二都のあちこちをこれほどのペースで走り回ったのは、私の四半世紀のロシア訪問歴でも初めてのことだった。

移民の権利保護およびロシア人との関係

中央アジア・カフカスからの移民は、警官のゆすり・たかり、スキンヘッドやロシア民族主義者による襲撃などの危険にさらされ、また自らが問題を起こした場合でも公正な扱いを受けられないことが多いと言われる。そこで私が関心を持ったことの第一は、移民がどのようなトラブルに直面しているか、彼らの権利を守るためにどのような制度や活動が存在するかであった。労働許可・滞在許可制度が複雑かつ混乱・腐敗しており、手続をしてもしなくても警察などに金を取られるので、最初から手続をしない者が少なくないという話は以前から文献で読んでいた通りだったが、遺体を安置所から引き取るにも賄賂を払わされる、単なる滞在手続違反で1年半拘留され続けている者もいるといった生々しい話を、タジク人の人

クルグズスタン出身者の団体のオフィスにて

権活動家らから聞いた。

移民団体の活動が目立つのは、クルグズスタン出身者である。ビジネスで成功した者がリーダーとなって、大使館・領事館とも協力しつつ、新しく移住してきた人々の就労援助や裁判対策をする体制ができており、クルグズスタンに本部があるザマンダシュ協会（政党を作って地方議会にも進出している）が彼らを糾合している。他方ウズベキスタンとタジキスタン出身の人々は、自国の政府・大使館はクルグズスタンと違って何もしてくれないと、口を揃えて言っていた。両国出身の人々は、ロシア語知識や職業技能が乏しく移民の最底辺にいるとされる。モスクワのロシア国籍のウズベク人たちは、移民のために短期技能訓練コースを開設し（公的な訓練コースやロシア語コースには、効果がないものや、金を取って修了証書を出すだけで実体のないものが多いという）、ロシア法の規定に従った民族文化自治体を設立して、政府との交渉のチャンネルを作ろうとしている。

私が関心を持った第二の大きな問題は、移民とロシア人との関係であるが、これについてはかなり意見が分かれていた。モスクワのムスリム宗務局関係者たちは、移民と彼らを嫌うロシア人たちがどちらも包囲された要塞のような自己認識を持っている、ムスリムを追い出せという正教聖職者や地方行政官がいると語り、危機意識を示していた。他方研究者の中には、マスコミが民族間関係の悪い面を誇張しているが、日常的な関係はノーマルであり、身の危険を感じて帰国する移民はまずいないと指摘すると同時に、一見正常な関係の中にも危険が潜んでいるという認識を示す人が多かった。民族間関係は中央アジアや西欧と比べても悪くないが、ロシアでは政治家が民族主義・排外主義に大きく関与しているのが違いである、という意見が中央アジア出身者複数から聞かれたし、ロシア人は移民に対して常に排斥の態度を取っているわけではなくとも、移民について意見を聞かれると否定的なことを言う傾向があると、ロシア人の研究者・社会活動家らから聞いた。ある社会学者は、攻撃的な人は多くないが、暴力を黙認する人、事件が起きると差別側に立ち、動員されうる人は多く、移民局の役人でさえそうであると指摘した。日常の関係は正常だとしても、現実を排外主義的言説に合わせようとする力が働くから危険である、移民が自己流にふるまうのを許してやっている、という上から目線での寛容も隠れたクセノフォビアだ、という別の社会学者の指摘にもはっとさせられた。

もちろん、移民たちも単なる受動的な被害者ではない。移民による犯罪が存在すること（麻薬関連の犯罪のほか、移民同士の殺傷事件が相当多いし、外国人の犯罪と外国人への犯罪は同程度であるとの指摘も聞かれた）、出身地ではできない放埒な生活をしたがる人がいることも事実である。したがって移民に警戒心や脅威感を持つ地元住民がいることを軽視してはならない。研究者は移民側に立ちがちだが、移民の社会統合が移民と受入側社会双方にとって有利である必要があるとし、民族間のけんかを防ぐ方法を話し合う交流を武術クラブで実践している研究者もいる。移民は知り合いを頼りに移住することが多く、トラブルが起きれば

助け合い、またロシアで成功し国籍を取っていてもいずれは帰郷しようという気持ちが強いが、「ロシア人＝個人主義者、アジア人＝集団主義者」というステレオタイプを持つロシア人の側からは、このような移民の集合性の高さが脅威と感じられるようである。他方、排外主義・民族主義の高まりに嫌悪感を持つロシア人も当然いる。当事国以外の研究者は、移民というと、境界を軽々と越える人というイメージで語ることが多いが、彼らの存在や出身地とのつながりが逆に、地元民が何を社会的・心理的な壁と感じるかを明らかにし、地元民同士の考え方の違いをも浮き彫りにするのである。

石油の町スルグトの発展と摩擦

以上がモスクワとサンクトペテルブルグでの調査の概要だが、スルグトでも大学の研究者が大変親切で、自ら情報を提供してくれただけでなく、北カフカス（ダゲスタンとチェチニャ）出身者の団体代表らとの面談を組織してくれた。しかしこの時少々困ったことが起きた。というのは、団体代表者の一人がこのような会合は当局立ち会いのもとで行われなければならないと考えて市役所に通報し、市の担当部署の長がやってきて、彼が仕切る形で会合が行われたのである。北カフカス出身者たちの話は当然ながら、地元住民との間に民族対立はない、日常生活上の衝突は年長者の権威で防ぐ、そもそもわれわれはロシア国民であり移民ではない、といった建前論に終始した。しかしそれだけ当局が移民問題に神経質になっていることは見て取れたし、民族団体の代表者の中には、格闘技の元世界チャンピオン、石油技師、歯科医、教師などさまざまな職業の人がいて、北カフカス出身者が多様な分野に進出していることが分かった。ロシア国内で教育を受けただけあって、ロシア語の知識も問題ないようだ（むしろ民族語を忘れる傾向があるとも聞いた）。ダゲスタンとチェチニャにまたがって住むノガイ人が、両者とは別のまとまりを作っているらしいことも興味深かった。

スルグトのモスク

スルグトでは町の散歩も楽しめた（前の週まではマイナス 30 ～ 40 度の寒波に襲われていたが、私が行った時は幸い、札幌の真冬並みのマイナス 6 ～ 10 度くらいだった）。特にモスクは壮麗で、金曜礼拝の際には主にカフカス系と思われる多くの信者で賑わっていた。プロテスタント、カトリック、ロシア正教の教会もそれぞれ美しく、経済発展の効果が宗教活動にも及んでいることが窺えた。

自治管区の先住民であるハンティ人とマンシ人は、人数が非常に少ないこともあって会う機会がなかったが [(2)]、スルグト大学の研究者によれば、自治管区の存在理由を示すために先住民への優遇策が取られており、地方で狩猟生活をしている人でも、町にアパートを持っているのが普通だという。もっとも、ハンティ語、マンシ語を学べる場所がハンティ・マンシースクのユグラ大学にしかないなど、先住民の文化振興が盛んに行われているとは言い難いらしい。移民との関係では、以前はハンティ人が市場で魚を売っていたのが、最近はカフカス出身者が彼らから買い付けて市場で売っているという話も、別の人から聞いた。

この町の本格的な発展は、アゼルバイジャン人地質学者サルマノフが1961年に油田を発見したことから始まっており、その後さまざまな民族が石油技術者や労働者として来住し、多民族が共住してきた。そもそもロシア人も大半は、ソ連時代後期以降に移住してきた人々である。そのような背景のある町でありながら、経済発展が遅れ人口が増える北カフカスや中央アジア、アゼルバイジャンからの移民が近年急増することで、軋轢が生まれているようだ。

最もショッキングだったのは、スルグトに行く前にサンクトペテルブルグで会った、スルグト出身のロシア人の話だった。「私たちの町は黒くなっている」と言うので最初何のことかと思ったら、要は、「スルグトの交通や商業は山〔カフカス〕から下りてきた黒い連中に握られている。彼らはアリのように集まり、子どもや女性が怖い思いをしている」というのであった。この人はがちがちのロシア民族主義者というわけではなく、ハンティ人らの文化を記録・保存する活動をしている人である。タタール人には非常に好意的で、ウズベク人やタジク人の勤勉さも肯定的に見ており、カフカス系だけを目の敵にしているようだ。移民排斥が単純な民族主義だけではなく、非ロシア人の間に線引きをする心理にも基づいていることを感じさせられた。

民族衝突の現場、ビリュリョヴォ

ショッピングセンター「ビリュザ」

最後にモスクワに再度寄った際には、西ビリュリョヴォ地区を歩いた。ここは2013年10月にアゼルバイジャン人による地元住民殺害事件が起きた後、ロシア民族主義組織の指導者を含む数千人が行進し、その一部が暴動を起こした場所である。彼らは中央アジア・カフカス系の通行人を襲い、ショッピングセンター「ビリュザ」を襲撃・放火し、移民労働者が多く働く青果卸売市場「ポクロフスカヤ」に侵入した。同時期にモスクワ各地で中央アジア・カフカス出身者への襲撃が相次ぎ、東ビリュリョヴォではウズベク人が殺された。警察は暴動参加者を逮捕するとともに、無許可移民労働者を大量摘発し、ポクロフスカヤ青果市場も閉鎖した。

ビリュリョヴォはモスクワ都心から南に20キロほど離れ、ドモジェドヴォ空港とモスクワ・パヴェレツキー駅を結ぶ鉄道の沿線にある。空港特急は通過してしまうので、各駅停車でビリュリョヴォ旅客駅に降り立つと、古い団地が並ぶ貧相な風景が広がっていた。近くでは熱併給火力発電所がもくもくと煙を吐いている。ビリュザは修復され営業していたが、いかにも場末のショッピングセンターという雰囲気で、警備員が異様に多いのが印象的であった。周辺には商品搬入の関係者とみられる非スラヴ系の数人がいたものの、店員は基本的にスラヴ系に見えた。ポクロフスカヤ青果市場は閉鎖されたままであった。モスクワでの民族紛争として最悪の事件の一つがこのような貧しい場所で起きたのは、社会の矛盾が周縁で発火するという典型例のように思えた。

調査の後で：ウクライナ情勢を見ながら

言うまでもなく、今回の調査はごく短期間のもので、ロシアの移民労働者問題の深層に迫れたとは言えない。面談相手は基本的に、ロシア人・非ロシア人双方のインテリないしエリートに限られた。タジク人の人権活動家からは、「民族団体の長は移民の生活を知らない。町中は平穏に見えるが、市場ではいろいろなことが起きている」と言われたが、次に調査する機会があれば、労働者を含めさまざまな立場の人に会う必要があるだろう。

ところで、私のロシア滞在は、ウクライナでヤヌコヴィチ前大統領が逃亡して暫定政権ができた直後、ロシアのクリミア併合への流れができていく時期に当たっていた。滞在中、ウクライナ関連の情報を積極的に集める時間はなかったが、テレビをつけるだけでも、暫定政権はファシストの政権である、ウクライナではロシア語が禁止されたといった、少し調べれば嘘と分かる情報が意図的に流されていること、ロシアによる介入の準備が、政界一丸となって着々と進められていること（ウクライナでのロシアの軍事力行使を上院が承認したのが3月１日）が分かった。中央アジア・カフカス出身の人々の多くも、ロシアのウクライナ報道を信じているようだった。

帰国後にソーシャルメディアなどでの発言を見ていると、調査中に私が会った人々のウクライナ問題に関する意見は真っ二つに割れていて、互いに耳を貸さない状況のようである。その一人で、移民を含む民族間交流・国際交流を促進する団体のロシア人は、ウクライナへのロシアの介入を支持する発言を繰り返しており、移民労働者に対する上から目線的な保護姿勢とロシア大国主義が両立することを示している。しかし結局のところ、移民労働者排斥と、ウクライナへの介入は、旧ソ連地域の人々という身近な他者の中に敵を見つけて攻撃しようとする病的な心理という面で共通しているのではないか。そして、上から目線的な保護主義も含めて、自分の言うことを聞いてくれる相手には優しいが、そうではない人々を人間扱いしない態度が広まっているのではないか。

私の旧ソ連地域民族問題研究の原点の一つは、ペレストロイカ期に留学したモスクワ大学の寮で、さまざまな民族出身の学生たちが、ソ連のあちこちで起きている問題を理解しよう、多様な主張に耳を傾けようとしていた姿勢に接したことにある。最近のロシアでは、ソ連が経済的に苦しいぼろぼろの大国であったことを忘れたかのようなソ連復活待望論がかまびすしいが、むしろ、ソ連の人々が諸民族の友好と平等を（建前的ではあれ）信じていたことを思い出すことが、さまざまな問題の解決の出発点になるのではないだろうか。

---

* 調査に当たっては非常に多くの方々にお世話になったが、特に、サンクトペテルブルグ・ヨーロッパ大学のセルゲイ・アバシン教授と、スルグトでの調査のために出発前にアドヴァイスしてくださった首都大学東京大学院博士後期課程の大石侑香さんに深く感謝したい。

1 *С. В. Рязанцев.* Трудовая иммиграция в Россию: старые проблемы и новые подходы к регулированию // Вестник Санкт-Петербургского университета. Серия 5, Экономика. 2013. № 1. С. 4–5. なお、今回の調査では残念ながら、南カフカスからの移民と話をする機会は得られなかった。

2 2010年国勢調査によれば、スルグト市住民約31万人のうち、ハンティ人は632人、マンシ人は256人しかいない。自治管区全体でも、人口比がそれぞれ1.2%、0.7%の少数派である。

学界短信

◆ 学会カレンダー ◆

2014 年 6 月 7-8 日　比較経済体制学会 2014 年第 54 回全国大会　於山口大学吉田キャンパス
http://www.jaces.info/info.html
6 月 21 日～8 月 9 日　Harvard Ukrainian Summer Institute
http://www.huri.harvard.edu/husi.html
6 月 27-28 日　第 6 回スラブ・ユーラシア研究東アジアコンファレンス　於ソウル
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/text/2014SeoulProposal.pdf
7 月 10-11 日　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 2014 年度夏期国際シンポジウム「危機の 30 年：第一次～第二次世界大戦期ユーラシアにおける帝国・暴力・イデオロギー」
2015 年 8 月 3-8 日　ICCEES 第 9 回大会　於幕張 http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。［大須賀］

大学院だより

2013 年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、3 人が修士課程を修了しました。また、立花優さんが「ポストソ連期アゼルバイジャンの政治変容：旧ソ連地域における政治体制の事例研究」という論文で課程博士号を取得しました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。4 月には、修士課程 5 名、博士課程 2 名の新入生を迎えました。今年度の大学院生は以下の皆さんです。［長縄］

2014 年度スラブ社会文化論専修大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員（正・副）	
D3	大武由紀子	アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス	望月	越野
D3	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフと 20 世紀初頭のロシア文学	越野	望月
D3	斎藤祥平	ファシズムとコミュニズムの間のユーラシア主義	望月	野町
D3	松下隆志	現代ロシアのポストモダン文学	望月	越野
D3	韓寶（ハンボリ）离	中央アジア高麗人社会の改宗と伝統	宇山	長縄
D3	長友謙治	ロシアの穀物輸出国としての発展可能性	山村	田畑
D3	西原周子（しゅうこ）	セルビア語の標準語規範と知識人コミュニティ	野町	望月
D3	アセリ・ビタバロヴァ	中央アジア諸国・中国間関係における相互認識	岩下	宇山
D2	ヤン・ファベネック	オホーツク海域及びその沿岸地域をめぐる現代の地政学	岩下	田畑
D1	小野瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄
D1	服部倫卓（みちたか）	ロシア・ウクライナ・ベラルーシの対 EU 経済関係	田畑	山村
M2	河津雅人	ウクライナの民主化	宇山	家田
M2	中田宏治	19 世紀前半の日露外交	岩下	長縄
M2	古川雅規	ロシア語とチェコ語の接頭辞の比較研究	野町	望月
M2	生熊源一	現代ロシアのパフォーマンスアート	越野	望月
M2	植松正明	戦間期エストニアの議会政治と農地改革	長縄	家田
M2	高橋伽奈	ロシアの近隣外交とその他諸国外交の関連性	岩下	宇山
M2	平岩史子	19 世紀末から 20 世紀初頭のロシアとアメリカのユートピア文学	越野	望月

M2	アリベイ・マムマドフ	ロシアにおける日本の領土問題観	岩下	田畑
M2	真弓浩明	北方領土問題における重層的アプローチの模索	岩下	宇山
M2	李欣 燭（リ キンショク）	中国とロシアにおける対外経済制度改革に関する比較研究	田畑	山村
M1	カマロフ・アブドゥルアジズ	日系企業のロシアにおける人的資源経営	田畑	山村
M1	川淵華子	20 世紀前半におけるウクライナの民族問題	長縄	宇山
M1	金盾	ロシア東部地域における日系小売業の発展の可能性	田畑	山村
M1	長谷川さゆり	ロシアの国防費と軍の近代化	田畑	山村
M1	卞 曉 歓（ベンショウカン）	国際金融危機におけるロシアと中国の対応策の比較	田畑	山村

図書室だより

◆ 『カフカス集成 Кавказский сборник』(1876-1912) リプリント版の購入 ◆

2013 年度にセンター図書室がリプリント版を購入した『カフカス集成』は、「60 年に亘り甚大な犠牲を払い、帝国の精神的・物質的資源に極限まで緊張を強いたカフカス戦争という雄大な時代を詳細に研究する必要性」（第 32 巻第 1 部巻頭）から、カフカス総督ミハイル・ニコラエヴィチ大公（1832-1909）の指令で 1876 年に創刊、1912 年に第 32 巻を出して停刊した年報である。編集長は、チフリス（トビリシ）に置かれたカフカス軍管区参謀部の戦史課の長が務め、19 巻（1898 年）まではチェルニャフスキー、20 巻（1899 年）から 30 巻（1910 年）までヴァシリー・ポット（彼は 1870 年代にはオレンブルグ地方で勤務していた）、31 巻（1911）から 32 巻第 1 部までヴラジミル・トムケエフ、32 巻第 2 部はスピリドン・エサゼ（1870-1927）だった。19, 20, 21 巻に過去 20 巻分の目次に加え、人名・地名・部隊の索引もあるので、利用者はまずこれらの巻から概要を知ることができる。また、『カフカス集成』復刊第 1 号（2004）の巻末には、1-32 巻の総目次と索引が収録されている。

『カフカス集成』は、その刊行目的にあるように、1780 年代末から 1870 年代の南北カフカスで展開された戦闘に参加した軍人の記録を中心に、カフカス戦争とその周辺に関わる史料と研究を収録するものである。とりわけ、北東カフカスで展開された対シャミール作戦については詳細で、モシェ・ガンマーの *Muslim Resistance to the Tsar* や *The Lone Wolf and the Bear* でも記述の軸となっている。カフカス戦争を現場で指揮した「ロシア人」将校たちの中にグルジア人やアルメニア人が少なからずいたことはよく知られている。『カフカス集成』には、これらの「ロシア人」たちの経歴や人脈を新たな観点から照射する材料に事欠かない（例えば、26-29 巻にあるグルジア貴族 Иван Гивич Амилахвари の記録にはロリス = メリコフの名がしばしば出てくる）。また、ダゲスタンの平定は、テュルク系のクムィク人有力者を主に味方に付けながら遂行されたことが確認できる（例えば、12 巻の Агалар-бек や Алхаз-Гусейн）。

帝国とは何かを考える時、戦史は不可欠だが、日本のロシア史研究ではこの点はまだ十分に意識されていないように見える。『カフカス集成』のもつ今後の研究を展開する上での可能性として、管見の限り、ひとまず以下の三点を挙げておきたい。まずクリミア戦争の見直しである。この戦争の敗北でロシアは後進性を自覚し、大改革を始めたというのが定説である。しかし、当時のロシアは、黒海東岸、峻厳なカフカス山脈、カスピ海西岸で激烈な戦闘をすでに数十年続け、その上でクリミア半島に軍を展開したのである。こうした驚異的な軍隊の展開能力と「後進性」との関係は問わなければならない。『カフカス集成』は、カフカス戦争

とクリミア戦争を連続的に見る材料で満ち溢れている。第二に、対オスマン・対イランの戦争とカフカス戦争を総合的に把握することである。とりわけ、1826-28 年のイランとの戦争に関する文書は極めて豊富だ（21-30 巻）。その中には、1813 年のゴレスターン条約（1804 年に始まったグルジアをめぐるイランとの戦争の結果、締結された）に基づく国境画定の交渉という興味深い文書もある（24 巻：エルモーロフから皇帝に宛てた 1824 年 6 月 2 日付報告書）。対オスマンでは、クリミア戦争だけでなく、1787-1792 年と 1828-1829 年の露土戦争に関する資料も収められている（1787-1792 年については 14, 15, 17, 18, 20 巻。1828-1829 年については 30, 31 巻）。第三に、地域史としてオセチア、クバン、アブハジアの征服過程をたどることである（例えばクバンは 5, 10, 11 巻、32 巻第 2 部、オセチアとアブハジアは 13 巻）。21 巻にはチェルケス人、30 巻には「西カフカスの人々」の民族誌がある。

『カフカス集成』の戦史は当事者の息遣いが聞こえるほどの緻密な記録であり、その微細な記述の読解には相当の忍耐が必要だ。しかしその先には、われわれがまだ見たことのないロシア帝国が広がっている。［長縄］

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

今回は数がとても少ないですが、意欲作を掲載することができました。丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。

次の第 62 号の原稿締め切りは、2014 年 8 月末の予定です。特集への事前申し込みは、4 月末で締め切りましたが、今後も随時受け付けます。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締め切り厳守でご提出ください。［長縄］

◆ 「シリーズ・ユーラシア地域大国論」第 6 巻 ◆
『ユーラシア地域大国の文化表象』（望月哲男編）の刊行

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 6 班「地域大国の文化的求心力と遠心力」の成果として、3 月にミネルヴァ書房から標記の論集が出版されました。全体は 3 部構成になっており、

第 1 部「アジアにおける文化表象の諸相」では、他者の文化やグローバルな価値との接触、その受容や解釈において生ずる社会集団の文化的自己認識に関わる問題が、キリスト教音楽、映画、ユネスコの世界遺産といった事象をめぐって論じられています。

第 2 部「中国とロシア：相互認識と文化表象」では、近代におけるロシアと中国の間の相互理解・相互表象の形成のあり方とその特徴が、外交史論、図像表象論、文学的表象論という複数の角度から論じられています。

第 3 部「インドとロシア：境界を越える思想」では、ロシアの知と精神がインド文化に接近した 19 世紀末から 20 世紀初期にかけての時代に焦点を当て、そこに生じた化学反応にも似た交流の様態が、神智学、仏教、共産主義、非暴力思想といった概念を核に描き出されています。

序章には以上のような議論のための準備運動として、露中、露印の文化関係史を 20 世紀の入り口までのスパンで略述しました。本書は 3 国の文化の総合的な比較分析を狙ったものではありませんが、いくつかの選択されたテーマを通して見えるユーラシア文化交流の風景として、ご参考にしていただければ幸いです。詳しい内容は下記で。［望月］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/books_new/EurasianRegion/no6.html

◆ 「比較地域大国論」No. 14 ◆
Regional Routes, Regional Roots?
Cross-Border Patterns of Human Mobility in Eurasia の刊行

本論集は、新学術領域研究「比較地域大国論」第 5 班「国家の輪郭と越境」が 2010 年 12 月におこなった国際シンポジウム「回帰と拡散：地域大国における人間の移動と越境」から 9 本の論文を収めたものです。他の班が比較の単位を明確にする必要上、どちらかといえばロシア、中国、インドという国家の枠組みを前提としていたのに対して、本論集は、人、モノ、思想の越境的流動やエスニック・マイノリティに着目することで、国家の枠を問い直すと同時に、その枠のしなやかな強さも再確認することを目指しました。

論集は 4 部から成ります。第一部は、インド北部・南部出身者、中国沿海部出身者、アルメニア人という典型的な商業ディアスポラを取り上げ、これらの集団が活動領域を重ねながら、ユーラシア大陸さらに海域の商業空間を結びつけていた長期的な動態を描出しています。第二部は、クルド人とアフガニスタンを例に、帝国間の競合を利用する特定の集団や個人のしたたかさと同時に、まさにそのことが安定した国民国家建設を妨げてきたことを論じています。第三部は、インドのマルワリー商人とカザフスタンの「ディアスポラ政策」を例に、ディアスポラの人々がどのように「故郷」を想像しているのか、また「故郷」とされている国家がディアスポラと「国民」との紐帯をどのように作り出そうとしているのかという問いに取り組んでいます。第四部は、現代中国における「毛沢東信仰」とインド西部のヒンドゥー教の巡礼を取り上げて、経済発展に疲弊した人々が精神的な原点に立ち帰ろうとする運動そのものが新しいビジネスを生み出し、それがさらに観光という形でこの精神的原点回帰への人々の参加を促進するという、信仰と消費の一筋縄ではいかない関係性を浮き彫りにしています。内容はウェブサイトでも閲覧できます。［長縄］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no14/contents.html

◆ Slavic Eurasian Studies No. 26 ◆
Slavic and German in Contact:
Studies from Areal and Contrastive Linguistics の刊行

本論集は、スラブ諸語とドイツ語の言語接触における語彙借用や言語構造の変化、スラヴ諸語の文法構造とドイツ語との対照分析に関する論文が掲載されています。本論集の特徴として、スロヴェニア語やセルビア語といったよく知られた言語だけではなく、これまで必ずしも研究蓄積が多くないブルゲンラント・クロアチア語、シロンスク語、カシュブ語といったマイノリティ言語も扱われている点が挙げられます。もちろん本論集が扱うことができたのは、タイトルが示しうる内容の極々一部でしかありませんが、参加者は若手から重鎮までさまざまであり、当該分野におけるセンターの国際共同研究への大きな足掛かりになったと思われます。内容はウェブサイトでも閲覧できます。［野町］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no26_ses/contents.html

◆ Slavic Eurasian Studies No. 27 ◆
Transboundary Symbiosis over the Danube: EU Integration between Slovakia and Hungary from a Local Border Perspective の刊行

本号はドナウ川を挟んで混住するスロヴァキア人とハンガリー人の関係を、国家ではなく、人や社会の視点から多面的にとらえようとする試みです。2012 年に国境の街コマールノ市で開催された国際ワークショップでの報告がもとになって編集されました。またこの研究は 2010-12 年のトヨタ財団助成研究「EU 統合と境界を跨ぐ地域社会の形成：ドナウ川を挟むスロヴァキア・ハンガリー国境地帯を共生の視点から問い直す」で手がかりをつかみ、その後、この手がかりを継承発展させた科研費研究「多層的な民族共生への道：ドナウ中流域と EU 統合」（2013-2018 年）による研究成果の一部です。［家田］

◆ スラブ・ユーラシア研究報告集別冊 ◆
『電離放射線と健康：いま誰もが知っておくべきこと』の刊行

この別冊特集号の著者オルガ・ティムチェンコ博士はウクライナ科学アカデミーの衛生・医学生態学研究所に長年勤務する研究者です。この研究所は放射能の生態に対する影響の基礎研究で重要な役割を担い、ティムチェンコ博士は指導的な立場にあります。2013 年の春に同研究所を監訳者が訪れたさい、低線量被曝が今の日本人にとって非常に大きな関心事なっているので、是非とも、参考になる論文を書いてくださいとお願いしたところ、ティムチェンコ博士は「喜んでお引き受けします。ウクライナ人は日本人がウクライナの子どもたちを救ってくれたことに感謝しています。今度は私たちがお返しをする番です」と快諾してくださいました。それがこの特集号の論文です。とても充実した内容ですので、英語でも読めるようにと、3 ヵ国語で出版しました。

またこの特集号は、チェルノブイリと福島の教訓を、世界と未来の世代に伝えることを目指す科研費研究「大規模環境汚染事故による地域の崩壊と再興：チェルノブイリ、アイカ、フクシマ」（家田修研究代表、2012-2015 年）と題する共同研究の成果でもあります。内容はウェブサイトでも閲覧できます。［家田］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic_eurasia_papers/SI/contents.html

◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 6 ◆
The Multilingual Society Vojvodina: Intersecting Borders, Cultures and Identities の刊行

本論集は、編者たちがグローバル COE の研究領域の一つとしてきた、セルビア共和国のヴォイヴォディナ自治州の多民族・多言語・多文化状況について、「境界」を共通の切り口として、主に個別事例に基づき多角的に分析したものです。論文査読の過程で、当初計画した論集の構成と大きく変わってしまい、論文の数が大幅に減ってしまいましたが、掲載された各論文の質はどれも高いものと言えます。執筆者が研究対象とする地域および言語は、セルビア、スロヴァキア、ルーマニア、クロアチアとさまざまであり、また専門も歴史学、言語学、社会学、カルチュラル・スタディズなど多様です。尚、このセンターニュースで紹介していますが、今年 2 月に本テーマによる国際ワークショップも開催されました。多言語・多文化の共存が叫ばれる現在、ヴォイヴォディナ研究の成果は、この問題の一般論にも貢献できるものと考えられます。内容はウェブサイトでも閲覧できます。［野町］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic_eurasia_papers/no6/contents.html

◆　スラブ・ユーラシア研究報告集別冊『比較研究の愉しみ』の刊行　◆

センターニュース第 135 号でお知らせしたように、センターは国立大学附置研究所・センター長会議第 3 部会の部会長校として、シンポジウム「比較研究の愉しみ」を 2013 年 10 月 4 日に開催しましたが、その報告集が 2014 年 2 月に刊行されました。藤原辰史「第一次世界大戦の共同研究：その比較史的課題」、黒木英充「地域を股にかける人々を比較して：レバノン・シリア移民研究の地平」、田畑伸一郎「ロシアと中国とインドの経済を比較したら何が分かったか ?」の 3 報告および討論を収録し、当日の充実した議論の雰囲気を伝える、臨場感あふれる報告集となっています。内容はウェブサイトでも閲覧できます。［宇山］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic_eurasia_papers/SV/contents.html

会　議（2014 年 2 ～ 3 月）

◆　センター協議員会　◆

2013 年度第 8 回　2 月 5 日

議題
1. 教員の人事について
   1）教授人事に関する候補者の決定について
   2）「境界研究ユニット」助教に関する選考委員会報告について
   3）助教人事の選考委員会設置について
2. 客員教授・准教授の選考について
3. 内規の改正について
4. その他

2013 年度第 9 回　2 月 20 日

議題
1. 教員の人事について
   1）「境界研究ユニット」助教候補者の決定について
   2）助教人事に関する選考委員会報告について
2. 研究生の受け入れについて
3. その他

2013 年度第 10 回　3 月 4 日

議題
1. 教員の人事について（助教候補者の決定について）
2. 非常勤研究員の選考について
3. その他

［事務係］

みせらねあ

◆　センターの役割分担　◆

2014 年度のセンター研究部専任教員の役割分担は、次ページの通りです。［家田］

センター長（5/1 ～）..... 家田
副センター長 ..... 田畑
拠点運営委員会委員 ..... 家田／宇山／田畑／岩下／山村

【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議 ..... 家田
教務委員会 ..... 家田
創成研究機構連絡会議 ..... 家田
低温科学研究所運営委員会 ..... 家田
図書館委員会 ..... 岩下
観光学高等研究センター運営委員会 ..... 岩下
社会科学実験研究センター運営委員会 ..... 山村
情報法政策学研究センター運営委員会 ..... 家田
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会 ..... 山村
オホーツク環境ネットワーク ..... 田畑
利益相反審査会委員 ..... 家田
環境負荷低減推進員 ..... 山村
男女共同参画企画調査専門委員 ..... 山村
ヘルシンキ・オフィス長 ..... 田畑

【学外委員会等】

国立大学附置研究所・センター長会議 ..... 家田
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会 ..... 家田
JCREES 事務局長 ..... 家田
地域研究コンソーシアム理事 ..... 家田
地域研究コンソーシアム運営委員 ..... 野町／長縄
人間文化研究機構地域研究推進委員 ..... 宇山
京都大学地域研究統合情報センター拠点運営委員 ..... 岩下
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員 ..... 宇山

【センター内部の分担】

大学院講座主任..... 田畑
教務委員..... 長縄
入試委員..... 山村
将来構想..... 田畑／岩下／宇山／長縄
総合特別演習担当 .....(前期) 岩下/ (後期) 山村
全学教育科目責任者..... 長縄
全学教育科目総合講義..... 後藤／高橋
全学教育科目演習..... 長縄
点検評価..... 田畑／野町
夏期シンポジウム..... 宇山／長縄
冬期シンポジウム..... 岩下
図書..... 岩下
情報・広報..... 越野
予算..... 田畑
公募プログラム..... 山村
Abdirashidov, Zaynabidin (2014.7~2015.3) 宇山
Golunov, Sergey (2014.7~2015.3) ..... 岩下
Marples, David (2014.6~2014.8) ..... 越野
Lahusen, Thomas (2014.6~2014.8) ..... 望月
Papkov, Irina (2014.9~2014.10) ..... 長縄
Usmanova, Diliara (2014.6~2014.9) ..... 長縄
鈴川・中村基金..... 望月
公開講座..... 越野
研究会・講演会 (専任研究員セミナーを含む) ..... 野町
雑誌編集委員会..... 長縄／野町／ウルフ／越野／宇山
Acta Slavica Iaponica.....野町／ウルフ
『スラヴ研究』..... 長縄
スラブ・ユーラシア叢書..... 望月
ニューズレター和文..... 宇山／（家田）
ニューズレター欧文..... 岩下

◆　人物往来　◆

ニュース 136 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［家田／大須賀］

2 月　4 日　劉旭（中国人民大）
2 月　5 日　Rayna Dragičević（ベオグラード大、セルビア）、Ljudmila Popović（同）、Prvoslav Radić（同）、Divna Tričkovuć（同）
2 月　7 日　封安全（黒龍江省社会科学院、中国）
2 月 10 日　中村唯史（山形大）
2 月13-15 日　大西広之（日本島嶼学会）、織田敏史（根室市）、木村貴（九州国際大）、木村崇（京都大）、国末憲人（朝日新聞）、久保実（五島市）、黒岩幸子（岩手県立大）、小島和美（対馬市）、小濱啓由（竹富町）、小嶺長典（与那国町）、近藤温子（放送大）、島田龍（九州経済調査協会）、財部能成（対馬市）、田中輝美（山陰中央新報社）、田村慶子（北九州市立大）、中川善博（稚内市）、花松泰倫（九州大）福田宏（京都大）、普久原均（琉球新報社）、古川浩司（中京大）、本間浩昭（毎日新聞社）、宮本万里（国立民族学博物館）、山上博信（日本島嶼学会）
2 月 17 日　杉本良男（国立民族博物館）、ヨフコバ四位 エレオノラ（東京大、筑波大、東京外国語大）
2 月 24 日　安達大輔（東京理科大）
2 月 28 日　佐藤昭裕（京都大）
3 月　5 日　大串敦（慶應義塾大）、城下英行（関西大）
3 月6-7 日　北見諭（神戸市外国語大）、下里俊行（上越教育大）、根村亮（新潟工科大）、山本健三（島根県立大）
3 月 15 日　古澤文（愛知大）、渡邊三津子（奈良女子大）
3 月 24 日　塩谷哲史（筑波大）
4 月　7 日　日臺健雄（埼玉学園大）、皆川修吾（北海道大学名誉教授）
4 月 12 日　岩本由輝（東北学院大）
5 月　3 日　木村真三（獨協医科大）
5 月　9 日　杉山杏奈（中央ヨーロッパ大）

◆　研究員消息　◆

岩下明裕研究員は2014年1月21～31日の間、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関するセミナーへの出席と研究打合せのため、英国、フランスに出張。また 3 月 26 日～ 4 月 7 日の間、資料収集及び打合せ、また ABS 学会出席・研究報告及び意見交換のため、米国に出張。また 4 月 16 ～ 17 日の間、国際シンポジウム「Dynamism of De-bordering and Re-boedering in Inter-Korean Relations」での研究報告のため、韓国に出張。

長縄宣博研究員は 2 月 8 ～ 24 日の間、科学研究費研究における資料調査のため、ロシアに出張。

松里公孝研究員は 2 月 9 ～ 26 日の間、極東、シベリア、ウラル諸大学・研究所との協力関係強化のための現地調査及び打合せのため、ロシアに出張。また、3 月 14 ～ 24 日の間、ウクライナ情勢についての現地調査のため、ウクライナに出張。

田畑伸一郎研究員は 2 月 12 日～ 3 月 1 日、3 月 5 ～ 22 日の間、ヘルシンキオフィス運用業務のため、フィンランドに出張。

宇山智彦研究員は 2 月 22 ～ 3 月 3 日の間、打合せ及び情報収集のため、ロシアに出張。

越野剛研究員は 3 月 4 ～ 8 日の間、科学研究費研究における大連・旅順への合同調査旅行参加のため、中国に出張。また 3 月 18 ～ 26 日の間、原発事故とベラルーシ伝統文化保存に関する打合せのため、ベラルーシに出張。

野町素己研究員は 3 月 5 ～ 15 日の間、チェルノブイリ周辺地域における言語文化の保護に関する打合せのため、ロシアに出張。

家田修研究員は 3 月 6 ～ 29 日の間、北ユーラシアの環境文化政策に関する共同研究の可能性についての打合せ及び資料収集のため、ハンガリー、ウクライナ、ベラルーシに出張。［事務係］

目　次

センターの改称 1
スラブ・ユーラシア研究センターへの改称について

新センター長から 2
研究の最前線 4
2014 年度夏期国際シンポジウム「危機の 30 年」開催予告／ミッションの再定義結果公表／センター改称記念シンポジウム開催／ベオグラード大学との共同ワークショップ・シンポジウムの開催／ミロラド・ラドヴァノヴィッチ氏講演会／公開講座「記憶の中のユーラシア」開催中／フィンランドとの二国間交流事業の採択／北海道大学における「北ユーラシア研究会」の発足／ウクライナ情勢に関する講演会の開催と論考の連載／アナスタシア・フィオードロワさんの滞在／専任セミナー／研究会活動

グローバル COE 15
人事の動き 16
松里公孝教授の転出と記念講演会／地田徹朗さんと森下嘉之さんの助教就任／非常勤研究員紹介／ 2014 年度の客員教授・准教授／事務職員

「境界を越える人々」を通して見るロシア社会内の境界線：中央アジア・カフカス労働移民の調査から by 宇山智彦 18
学界短信 24
学会カレンダー

大学院だより 24
図書室だより 25
『カフカス集成 Кавказский сборник』(1876-1912) リプリント版の購入

編集室だより 26
『スラヴ研究』／「シリーズ・ユーラシア地域大国論」第 6 巻の刊行／「比較地域大国論」No. 14 の刊行／ Slavic Eurasian Studies No. 26 の刊行／ Slavic Eurasian Studies No. 27 の刊行／スラブ・ユーラシア研究報告集別冊『電離放射線と健康』の刊行／スラブ・ユーラシア研究報告集 6 の刊行／スラブ・ユーラシア研究報告集別冊『比較研究の愉しみ』の刊行

会議 29
センター協議員会

みせらねあ 29
センターの役割分担／人物往来／研究員消息

2014 年 5 月 31 日発行
編集責任　大須賀みか
編集協力　宇山智彦
発行者　家田修
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/